

厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）  
小児がん患者に対する在宅医療の実態とあり方に関する研究  
分担研究報告書

「病院・自宅以外での小児がん患者の看取りに関するアンケート調査」

研究分担者 古賀 友紀  
国立大学法人九州大学 准教授

**研究要旨**

小児がん患者の終末期医療においては、小児がん患者が終末期を自宅で家族と過ごすことが最善な場合が多い。しかし患者を取り巻く状況により在宅医療への移行が困難な症例が存在し、病院での看取りを余儀なくされる場合が多い。本研究ではアンケート調査により、治療病床、自宅以外での小児がん患者の看取りに関する各病院・地域での取り組みについての情報を収集する。小児悪性腫瘍患者の看取りの場所の現状を明らかにし、終末期の患者と家族に様々な選択肢があることを提案したい。

**A. 研究目的**

小児がんの在宅医療を含む終末期医療に関する医学的、社会的な現状調査を通じて、小児がん在宅診療が発展していくために乗り越えるべき課題を明確にし、その解決につながる施策提案につなげることを目的とする。

**B. 研究方法**

在宅療養の希望があっても、医学的もしくは地理的などの社会的要因により、その希望が叶えられないことはあり得る。成人の場合には、ホスピスおよび緩和ケア病棟が選択肢となるが、小児では終末期に対応できる緩和ケア病棟は非常に限られているのが現状である。そのような状況のなかで、病院

や家以外に家族が小児がんのこどもと過ごすことができる施設や設備に関する情報を共有し、検討する。

（倫理面への配慮）

本研究の遂行においては、「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針（平成29年2月28日改訂）」を遵守して行う。研究成果を発表する際には個人を識別できる情報の取り扱いには十分な対策を行い、プライバシーの保護に対して配慮する。研究代表施設である国立成育医療研究センターおよび、それぞれの施設の倫理審査委員会の承認を得て遂行する。研究成果を発表する際には個人を識別できる情報の取り扱いには十分な対策を行い、プライバシーの保護に対して配慮する。

**C. 研究結果**

現時点でアンケート調査開始前であるが、自施設の現状などを示した。

**D. 考察**

自施設の現状により在宅医療以外の看取りの方向性についても意義ある方向で示せる可能性が示唆される。

**E. 結論**

小児悪性腫瘍患者の看取りの場所の現状を明らかにし、終末期の患者と家族に様々な選択肢があることを提案することには意義があると思われ、早急な調査が望まれる。

**F. 健康危険情報**

なし

**G. 研究発表**

**1. 論文発表**

なし

**2. 学会発表**

なし

(発表誌名巻号・頁・発行年等も記入)

**H. 知的財産権の出願・登録状況**

(予定を含む)

**1. 特許取得**

なし

**2. 実用新案登録**

なし

**3. その他**

なし